

「三島硫黄島学園の硫黄島八朔太鼓踊り伝承活動の取組」

1 学校名

三島村立三島硫黄島学園

2 学年・人数

後期課程 7年～9年 男子 8人

3 日時・場所

(1) 練習の日時・場所

令和5年9月10日～14日 18:00～19:00 三島開発総合センター前

(2) 発表の日時・場所

令和5年9月15日・16日 17:00～19:00 三島村硫黄島熊野神社参道

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能，伝統行事について

(1) 名称

硫黄島八朔太鼓踊り（いおうじまはっさくたいこおどり）

(2) 由来

9月（旧暦8月1日，2日）に行われ国の無形民俗文化財に指定されている硫黄島八朔太鼓踊りは，豊臣秀吉の朝鮮出兵の際，島津義弘公に従い硫黄島から従軍した武将の凱旋祝として硫黄大権現宮に奉納したことに由来している。

(3) 構成等

矢旗を背負い，太鼓を胸につけ，鉢巻をした10人の踊り手と花笠をつけた鐘打ちが一緒になって勇ましく舞う。最後は海岸に出て，「タタキダシ」を行い，島の悪霊を追い出す。踊りの最中に仮面神メンドンが現れ，観覧している者たちを神木の枝でたたき，厄を祓う。

5 保存会や地域との連携の具体

硫黄島八朔太鼓踊りは，硫黄島地区の先輩から後輩へと伝承する形で行われている。中学生はいつか青年団の先輩のように華やかに踊ってみたいという憧れを抱く。夕方の1時間程度，八朔太鼓保存会の指導の下，太鼓を抱えて踊る練習を1週間ほど続ける。本番当日，海で体を清め，庄屋跡という旧家で待機をする。御神酒をいただいた後，かつての踊り手達が，若い踊り手たちにはっぱをかけながら伝統を託すように太鼓や矢旗を締め込み，送り出す。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

島内出身の青年が担ってきた硫黄島八朔太鼓踊りであるが，しおかげ留学生にも踊りの機会を与えている。中学生とはいえ，足腰が震えるほど体力を消耗する。1週間ほどの練習の最中には，青年会の方々だけでなく，保存会の皆さんの指導と声かけに励まされ，力強さを増していき，立派な「島の青年」へと成長する。また，中学生と一緒に教職員も練習に参加する。実際に踊ることができるのは中学生からだが，小学5・6年生も練習に参加し，先輩たちの踊りを見て学んでおくという風習がある。また，伝統的な衣装の着付けは適当にやるとはだけてしまうため，島の方がしてくださった。

7 取組の様子（練習状況、発表の場等）



島の青年や教職員との練習は約1週間続き、毎日汗だくになる。

伝統の衣装を身にまとい、踊ることは島の青年への成長であり、誇りでもある。

仮面神メンドンが島民の厄払いに走りまわり、たたくのである。

8 参加児童生徒・保護者・保存会・教員等の感想・意見

【9年生児童生徒】

私がしおかぜ留学生として硫黄島に来て半年が経ち、島の行事の一つである「八朔太鼓踊り」に参加することとなった。地域の伝統行事に参加することに緊張し、練習が始まるまではとても不安だったのだが、いざ練習が始まってみると、島の方々が細かくアドバイスをくださり、時には応援をしてくださり、とても嬉しかった。

様々な方に助けられながら行事をやりきったことで、島の一員としての自覚が芽生えた一週間だった。

【教職員】

大人にとってもきつい練習が1週間続いた。子供たちはよく頑張ったと思う。腰を低くし、普段はしたことのない動き、独特の節回しの唄、耳慣れない言葉の歌詞によくついていったと感じる。

【保存会から】

子供が減り、しおかぜ留学生にも手伝ってもらって八朔太鼓踊りを続けてきた。2018年にユネスコ無形文化遺産に認定されたメンドンをはじめとした硫黄島の風習を守り続けていくことはとても大切なことであり、しおかぜ留学生がその一端を担ってくれることは嬉しく思う。

【地域の方から】

あいさつもしなかったしおかぜ留学生が、八朔太鼓踊りを乗り越えたことで、別人のように明るくなった。昔は、八朔太鼓を踊ることが大人への通過儀式だったと思えるが、今の子供たちも同じように八朔で成長しているように嬉しく思う。